



北浦村の牧場にて

牛

ジェイムズ・ヒルトンの書いたものに、「めぐり来る時は再び」(time and time again) という小説がある。新しい年を迎えるたびに、私はこの言葉を思い浮かべる。1年がめぐり来るのは比較的早い。しかし、例えば丑年が再びめぐり来るのは12年も経過した後のことだ。その時に再び、牛の写真を巻頭に飾り、牛についての一談義をするのは誰だろうと思う。

12年もたてば人は変わり、牛もまた変わっているだろう。恐らく統計の分野にもいちぢるしい変革があるに違いない。ただいつになつても変わらないのは、その時々で作られて行く統計数字である。

牛に関する統計も、今までに大分出来ている。そんなことは、牛にとつては知つたことではないだろうが、牛の統計を眺めたお役人が、家畜増産計画などを立てたりすると、これはもう牛の運命にかかわつてくる。

昭和34年の家畜基本調査によると、わが国の牛の飼養頭数は、乳用牛が751,090頭、役肉用牛が2,365,320頭で、乳用牛の多いのは北海道の162,990頭、長野47,640頭、千葉40,400頭などで、又役肉用牛の多いのは鹿児島県の123,720頭、兵庫県114,950頭、広島県の107,520頭となつている。

1950年の世界農業センサスでは、本県の役肉用牛は58,037頭(飼養農家数56,925戸)乳用牛は2,237頭(同1,698戸)であつたが、それが1960年の農林業センサスの結果によると、役肉用牛78,982頭(同76,654戸)乳用牛は12,507頭(同7,801戸)と、とくに乳用牛の増加が目立っている。

数の増えるのは繁栄を意味しているのだろうが、自力で生きることの出来ない家畜の繁栄を、我々は牛のために喜ぶべきかどうか分らない。



年頭のごあいさつ

茨城県知事 岩 上 二 郎

県民の皆さん、あけましておめでとうございます。

皆さんおそろいで、お元気に新年をお迎えになられたことと心からおよろこび申し上げます。

さて、昨年は後進県からの脱却という一大目標をかかげ、農工商の調和のとれた発展をはかるための基礎的な諸条件の整備に努力した年でありましたが、皆さんの熱心なご協力によって、道路その他産業基盤は格段と充実し、企業の誘致もきわめて順調に進展してまいり、本県の天与の宝である豊富な水と広大な土地は、ようやく長い眠りからさめて躍動をし始め、開発の気運はいよいよ熱してまいりました。

そこで、本年はこれら情勢の進展に即応するよう、まず、県の行政機構についても産業の振興と社会福祉の増進を能率的にはかり得る体制に改め、また総合開発10カ年計画を樹立して、今までつちかつてまいりました産業基盤の上の一つ一つ着実にその花を咲かせて産業経済の飛躍的な発展と教育・民生の振興充実に全力をかたむけたいと存じます。

いまや、郷土茨城は、時代の進運に乗って急速に、しかも大きく転換をつづけております。この際、県民1人1人がその英知と創造力を十分いかして、積極的に進歩と改善に努力をいたしますれば、本県の前途は、まことに洋々たるものがあると確信いたします。

県民の皆さん、今年もまた、ともどもに手をたずさえて、本当に住みよい、私たちの郷土を築き上げるため、力の限りがんばりましょう。

輝かしい昭和36年を迎え、皆さんのご多幸とご活躍を心からお祈り申し上げまして、年頭のごあいさつといたします。

昭和36年1月1日



新年のごあいさつ

茨城県総務部長 秋 山 喜 市
茨城県統計協会会長

統計関係者の皆様、明けましておめでとうございます。

昭和36年の新春を迎えるにあたり、今年もまた皆様が御多幸の中に、この一年を迎えられますよう心から念願いたします。

さて昨年は、年初から農林業センサスを皮切りとし、大晦日の工業センサスをもつて一年の幕を閉じるまで、商業センサス、事業所調査、さらには第9回国勢調査と、統計界にとつては花盛りの年でありました。一度に迎えたこの花盛りの季節を、皆様は花の美しさを観賞する暇もなく、極めて御多忙の中にお過しになったことと存じます。お正月、おとそを含みながら、忙しかつた一年を省み、人それぞれの感慨に浸られたことでしょうか。幸いに、一気かぜに送つて寄りました一年を通じて、皆様御健康に、そして大した支障も生じなかつたことを、皆様共に喜びたいと思います。

今年には1961年、ゴールデン・シグステイを引継いで、果して世の中はどのように展開するのでしょうか。アメリカの大統領が変り、日本でも実質的には新しい政権が始まりました。池田首相は数字に明るいといふ新聞などに報じられていますが、日本の新しい歩みに、私達の作り出す統計が、よくその方向を与え得ますかどうか。

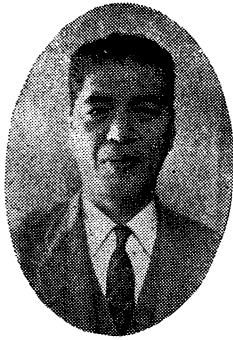
これは申すまでもなく、私達一人一人の力にかかっていることを自負すると共に、その責任の重大さを、新年にあたりあらためて痛感する次第であります。

今年の統計調査は、皆様御承知のとおり、大きな調査はありません。それでは昨年にくらべて、今年は統計は割合に暇だと思えるかも知れません。しかし、昨年行つた多くの統計調査は、数字がまとまつて、その数字が何かを表現するそれまでの段階の統計事務だつたといえましょう。色々の目的を成し遂げるために、現状の分析のために、将来の指針のために、判断の基準としての資料をあらゆる極き集めたのが昨年だつたといえるでしょう。統計の果す役割は本当はこれからです。掻き集めた資料を検討し、分析し、解説を加え、それを必要な関係方面に配布し、さらに不足している資料を探す努力が、とりもなおさず今年私達に与えられた課題だと思ひます。昨年咲いた花が実を結ぶのは今年であり、その実の穫り入れに最後の営々たる努力を重ねるのが今年であります。静かに、落着いた中でこれらの努力が積み重ねられるよう期待いたします。

昨年の全国統計大会では、地方統計はいかにあるべきかが論じられたように聞いております。これは即ち、県を始めとし、各市町村の地方公共団体が、今述べましたように、今年の統計の課題を各々自らのために果すならば、これは今までややもすれば等閑視され勝ちだつた地方統計を、本来の檜舞台に引き戻し、現代の市町村の発展に有効に寄与することは、まさに疑いないところと考えます。

統計関係者の皆様、昭和36年の統計事務がそのように行なわれ、昨年以上の幸福が、皆様方に訪れることを心から祈りして新年のごあいさつといたします。

昭和36年1月1日



新春にあたって

茨城県統計課長 根本倉吉
茨城県統計協会副会長

新年おめでとうございます。

1961年の年頭にあたり、皆様のご慶福を心からおよこび申し上げます。

昨年は、ご承知の通り「統計のあたり年」でございましたが、皆様の日夜を忘れた格別のご努力のおかげで、国勢調査は勿論のこと、世界農林業センサス、事業所調査、商業調査、はては工業調査と、どの調査にも目ざましい成績をおさめて、文字通りこの年を、私達統計人にとつては「あたり年」として、除夜の鐘を聞きおさめた事はご同慶の至りでございます。ここに新春を迎えるにあたり、皆様のご奮闘ご努力に対し、深く感謝申し上げたいと存じます。

昨年、年頭にあたり、昨年から始まる60年代の繁栄を皆様とともに希望いたしました。幸いその希望は昨年に関する限り、大きくかなえられたと考えます。好景気につけるニツクネームが昨年は縄文景気とやら、今年は何のようなニツクネームで、その恩恵にあづかることでしょうか。

統計界においては、今年は大調査の出つくしたあくる年でありますから、表面地味な年であります。しかし最近引き続き好景気が企業合理化の結果であり、その合理化に統計が大きな役割を果たしたことを考えますと、調査のない年即ち地味な年として安閑としているわけには参りません。今年は静かな年でありますが、それは又とない反省の年であり、沈潜の中から創造を生み出す年であります。

昨年行われた多くのなまの調査が、今までと違つた、現代にふさわしい内容と体裁をそなえて再登場するように、皆様のご新しいご努力をご期待申し上げたいと思ひます。

この輝く新春を迎え、ふたたび皆様と共によき年を送ることの出来ませう、皆様のご健康とご幸福をお祈り申し上げます。

昭和 36 年 1 月 1 日

1961年のごあいさつ

全国統計協会連合会長 大内兵衛

新年おめでとう、諸君とともに心から新春を祝いたいと思ひます。今年1961年私も72才になりました。新しい年を迎えるということは、いくつになつてもうれしいものです。

何かと気忙しかつた1960年を送り、ここに新春を迎え皆様にはよい年を迎えられたことでしょう。

私はこれまで、幸運にも意義ある多くの仕事にたずさわることができました。中でも日本がたたかきに敗れたあとの十年余の諸君とともに歩んできた統計再建の仕事は私のわすれることのできない、又やり甲斐のあつた事業だと信じています。

終戦直後は満足につかえる統計が少なく、統計を作り出す組織もほとんどかいついていたといつても過言ではない状態でありました。このようなき、多数の学者や役人の諸君が、その再建に共鳴され、国、都道府県、市町村の統計の仕事にたずさわつていた諸君も一致協力してその復興に努力されました。また、世界的な統計の指導者、スチュアート・Aライズ博士からの鞭撻と限りない友情がどれだけ私達をばげましてくれられたことか、忘れることはできません。このことは大きな仕事だけに思い出は深く、心にとつております。

昨年は国際統計協会の総会が30年ぶり、日本で開かれました。日本の統計事業も世界の中にたたかされて一人前になつたという感じがあります。この事業に心をくわけてきたわれわれにとつては、よき記念すべき年でありました。しかも会議が盛大に終始したことはわれわれの事業の成績を広く国民に認識してもらうために、又諸外國の統計マンに、日本の科学的努力を理解してもらうためにも大きな意義があつたことと信じます。

日本の統計はいま歩一歩と前進をとげております。世界に肩をならべて、大きなセンサスをつぎつぎと実施いたしました。しかしながら大きな事業をしたあとは反省が必要で、一つ今年は反省と再出発の年と考えたいと思ひます。

われわれの集めた数字が日本を通じて、世界を通じて人類の幸福に役立つことを信じ統計の新しい発展のためにがんばりたいと考えます。

御多幸を祈ります。